

# 序

医療従事者による患者さんへの薬の説明は、とかく副作用や生活上の注意が中心となり、薬の効果の説明が不足していると思うことがあります。また、副作用に関しても、抗がん剤以外の薬剤の場合は、その程度や頻度などといった説明が不十分のような気がします。

私は大手家電販売店で商品を購入する際、私の質問に何でも的確に答えてくれて詳細な情報を提供してくれる店員さんに出会うたびに「商品のことを隅々までよく知っていて凄い！ 正に専門家！」と感心します。そして同時に、薬剤師の私も専門家として、薬のことを深く理解した上で、信頼性のある確かな情報を患者に提供すべきだと思いつきました。

やがて私は病院薬剤師から薬学部の教員になりました。そして、学生に統計学や臨床試験を教える中で、薬の添付文書に関する大きな発見をしました。それは何かというと、添付文書の「臨床成績」の結果が世界的に権威のある学術雑誌に掲載されているという事実です。また、それにも関わらず、その臨床成績の内容が十分に活用されていないということです。そして、そのような状況だからこそ、その効果などのエビデンスは服薬指導に活用できるのではないかとも思いました。

活用されていない原因を考えてみると、臨床試験や統計学に関する教育の不足にあると思われました。それゆえ、臨床成績は信用できないと誤解されたり、臨床成績の適切な解釈ができなかったりして、それが不活用につながっているのではないかということです。そして、これを解決するためには、添付文書の背景にある臨床論文を読み解くことが重要であると考えました。添付文書に記載されているのは最終的な要約のみであり、それだけでは情報が断片的で深い理解にはつながらないからです。

そこで、本書では、「エビデンスに裏付けられた服薬指導と適切な薬学管理」ができるように、薬の有効性や安全性を吟味できるスキルを養います。具体的には、臨床論文の理解に必要な統計学を習得し、添付文書の背景となる臨床論文を読解して添付文書と臨床成績を深く理解できるようにします。そして最終的には、薬の効果に関する情報を服薬指導に活用し、患者さんから「薬のことを隅々までよく知っていて凄い！ さすが専門家！」と評価される水準になることを目指します。

本書によって添付文書の臨床成績の重要性が再認識され、患者さんへの服薬指導が充実し、患者さんとの信頼関係が向上することにつながれば、著者としてこの上ない喜びです。

2024年3月

湧井 宣行